

読書の今昔

寺田寅彦

青空文庫

現代では書籍というものは見ようによつては一つの商品である。それは岐阜ぎふち卓提灯ちようちんや絹ハンケチが商品であると同じような意味において商品である。その一つの証拠にはどこのデパートメント・ストアーでもちやんと書籍部というのが設けられている。そうして大部分はよく売れそうな書物を並べてあるであろうが、中にはまたおそらくめつたには売れそうもない立派な書籍も陳列されている。それはちようど手ぬぐい浴衣ゆかたもあればつづれ錦にじきの丸帯もあると同様なわけであつて、各種階級の購買者の需要を満足するようにそれぞれの生産者によつて企図され製作されて出現し陳列されているに相違ない。

商品として見た書籍はいかなる種類の商品に属するか。米、味噌、茶わん、箸、飯櫃はし めしびつのような、われわれの生命の維持に必需な材料器具でもない。衣服や住居の成立に欠くべからざる品物ともちがう。それかといって棺桶かんおけや位牌いはいのごとく生活の決算時の入用でもない。まずなければいけないでも生きて行くだけにはさしつかえはないものうちに数えてもいいように思われる。実際今でも世界じゆうには生涯しょうがい一冊の書物も所有せず、一行の文章も読んだことのない人間は、かなりたくさんに棲息せいそくしていることであろう。こういうふうに考えてみると、書物という商品は、岐阜提灯や絹ハンケチや香水や白粉おしろいのようなものと同じ部類に属する商品であるように思われて来るのである。

毎朝起きて顔を洗ってから新聞を見る。まず第一ページにおいてわれわれの目に大きく写るものが何であるかと思うと、それは新刊書籍、雑誌の広告である。世界じゅうの大きな出来事、日本国内の重要な現象、そういうもののニュースを見るよりも前にまずこの商品の広告が自然にわれわれの眼前に現われて来るのである。

自分の知る範囲での外国の新聞で、こういう第一ページをもつたものは思い出すことができない。日本にオリジナルな現象ではないかという気がする。このような特異の現象の生ずるにはそれだけの特異な理由がなければならぬ。また、こうなるまでには、こうなって来た歴史があるであろうが、それは自分にはわからな

い。

しかしこの現象から、日本人は世界じゅうで最もはなはだしく書籍を尊重し愛好する国民であるということ推論することはできない。なんとなれば、この現象からむしろ反対の結論に近いものを抽出することも不可能ではないからである。すなわち、もしもすべての人が絶対必要として争って購買するものならば何も高い広告料を払って大新聞の第一ページの大半を占有する必要は少しもないであろう。反対に広告などはいっさいせずに秘密にしておいても、人々はそれからそれと聞き伝えて、どうかして一本を手に入れたいと思う人がおのずから門前に市をなすことあたかも職業紹介所の門前のごとくなるであろう。

商品の新聞広告で最も広大な面積を占有するものは書籍と化粧品と売薬である。この簡単明瞭めいりょうなる一つの事実は何を意味するか。これはこの三つのものが、商品としての本質上ある共通な性質をもっていることを示すものと考えられる。

その第一の共通点は、内容類似の品が多数であつて、従つて市場における競争のはげしいということである。もしもそれらのある商品の内容が他の類品に比べて著しく優秀であつて、そうしてその優秀なことが顧客に一目ですぐわかるのであつたら、広告の意義と効能は消滅するであらう。しかるに化粧品や売薬の類は實際使いくらべてみた当人にも優劣の確かな認識はできない。評判のいいほうがなんとなくいいように思われるくらいのものである。

書籍の場合はまさかにそれほどではないとしても、大多数の読書界の各員が最高の批判能力をもっていない限り、やはり評判の高いはうを選ぶ。そうして評判は広告と宣伝によつて高まるとすれば、書籍の生産者が売薬化粧品商と同一の手段を選ぶのは当然のことであつて、これをとがめるのは無理であらう。ただ現在日本で特にこの現象の目立つのは、思うにそれぞれの方面において書籍の価値批評をする権威あり信用ある機関が欠乏しているためか、あるいはそういうものがあつても、多数の人がそれに重きを置かずして、かえつてやはり新聞広告の坪数で価値を判断するような習慣に養成され、そうしてあえてみずから疑つてみる暇いとまがないためであるかもしれない。

化粧品や売薬と、商品として見た書籍とを比較する場合に一つの大きな差別の目標となるのは、古本屋というものに対する古化粧品屋、古売薬屋の存在しないことである。神田かんだの夜店を一晩じゆう捜してもたぶん明治年間に流行した化粧品売薬を求めることができないであろう。しかし書籍ならば大概のものは有数な古書籍店に頼んでおけばどこかで掘り出して来てもらえるようである。それにしても神保町じんぼうちようの夜の露店の照明の下に背を並べている円本えんぽんなどを見る感じはまずバナナや靴くつした下のはたき売りと実質的にもそうたいした変わりはない。むしろバナナのほうは景気がいいが、書物のほうはさびしい。

「二人行脚ににんあんぎや」の著者故日下部四郎太博士がまだ大学院学生で岩くさかべしろうた

石の弾性を研究していたころのことである。一日氏の机上においてある紙片を見ると英語で座右の銘とでもいったような金言の類が数行書いてあった。その冒頭の一句が「少なく読み、多く考えよ」というのであった。他の文句は忘れてしまったが、その当時の自分の心境にこの文句だけが適応したと見えて今でもはつきり記憶に残っている。今から考えてみると日下部博士のようなオリジナルな頭脳をもった人には、多く読み少なく考えるという事はたといしようと思ってもできない相談であったかもしれない。書物を開いて、ものの半ページも読んで行くうちに、いろいろの疑問や思いつきが雲のごとくむらがりわき起こって、そのほうの始末に興味を吸収されてしまうような場合が多かったのではないか

と想像される。

こういう種類の頭脳に対しては書籍は一種の点火器のような役目をつとめるだけの場合が多いようである。大きな炎をあげて燃え上がるべき燃料は始めから内在しているのである。これに反してたとえば昔の漢学の先生のうちのある型の人々の頭はいわば鉄筋コンクリートでできた明き倉庫のようなものであったかもしれない。そうしてその中に集積される材料にはことごとく防火剤が施されていたものようである。

いずれにしても無批判的な多読が人間の頭を空虚にするのは周知の事実である。書物のなかつたあるいは少なかつた時代の人間のほうがはるかに利口であつたような気もするが、これは疑問と

して保留するとして、書物の珍しかった時代の人間が書物によつて得られた幸福の分量なり強度なりが現代のわれわれのそれよりも多大であつたことは確かであろう。蘭学らんがくの先駆者たちがたつた一語の意味を判読し発見するまでに費やした辛苦とそれを発見したときの愉悦とは今から見れば滑稽こっけいにも見えるであろうが、また一面には実にうらやましい三昧さんまいの境地でもあつた。それに比べて、求める心のないうちからくちばし嘴を引き明けて英語、ドイツ語と咽喉のどほとけ仏を押し倒すように詰め込まれる今の学童は実にしあわせなものであり、また考えようではみじめなものでもある。

子供の時分にやつとの思いで手にすることのできた雑誌は「日本の少年」であつた。毎月一回これが東京から郵送されて田舎いなかに

着くころになると、郵便屋の声を聞きたびに玄関へ飛び出して行ったものである。甥おいの家では「文庫」と「少国民」をとっていたのでこれで当時の少青年雑誌は全部見られたようなものである。そうして夜は皆で集まって読んだものの話しくらをするのであった。明治二十年代の田舎の冬の夜はかくしてグリムやアンデルセンでにぎやかにふけて行ったのである。「しり取り」や「化け物カルタ」や「ヤマチチの話」の中に、こういう異国の珍しく美しい物語が次第に入り込んで雑居して行った径路は文化史的の興味があるであろう。今書店の店頭に立っておびただしい少女少女の雑誌を見渡し、あのなまなましい色刷りの表紙をながめる時に今の少女少女をうらやましく思うよりもかえってより多くかわいそ

うに思うことがある。

生まれて初めて自分が教わったと思われる書物は、昔の小学読本であつて、その最初の文句が「神は天地の主宰にして人は万物の靈なり」というのであつた。たぶん、外国の読本の直訳に相違ないのであるが、今考えてみるとその時代としては恐ろしい危険思想を包有した文句であつた。先生が一句ずつ読んで聞かせると、生徒はすぐ声をそろえてそれを繰り返したものであるが、意味などはどうしてもよかつたようである。その読本にあつたことで今でも覚えているのは、あひるの卵をかえした牝めんどり鶏が、その養い子のひよつこの「水におぼれんことを恐れて」鳴き立てる話と、他郷に流りゆうぐう寓うして故郷に帰つて見ると家がすっかり焼けて灰ばか

りになっていた話ぐらいなものである。そうしてこの牝鶏と帰郷者との二つの悪夢はその後何十年の自分の生活に付きまとして、今でも自分を脅かすのである。そのころ福沢翁ふくざわおうちうの著わした「世界国づくし」という和装木版刷りの書物があつた。全体が七五調の歌謡体になつていたので暗記しやすかつた。そのさし絵の木版画に現われた西洋風景はおそらく自分の幼い頭にエキゾチズムの最初の種子を植え付けたものであつたらしい。テヘラン、イスパハンといったようないわゆる近東の天地がその時分から自分の好奇心をそそつた、その惰性が今日まで消えないで残つているのは恐ろしいものである。「団々まるまるちんぶん 珍 聞」という「ポンチ」のまねをしたもののがあつたのもそのころである。月給鳥という鳥の

漫画には「この鳥はモネーモネーと鳴く」としたのがあったのを覚えてゐる。官権党対自由党の時代であつたのである。今のブル対プロに当たるであろう。歴史は繰り返すのである。

「諸学須知」（しよがくしゆち）「物理階梯」（ぶつりかいてい）などが科学への最初の興味を注入してくれた。「地理初歩」という薄っぺらな本を夜学で教わつた。

その夜学というのが当時盛んであつた政社の一つであつたので、時々そういう社の示威運動のようなものが行なわれ、おおぜいでちようちん提灯をつけて夜の町を駆けまわり、また時々はみなみがわら南磧なでわうば奪い旗奪いの競技が行なわれた。ある時はある社の若者が申し合わせて一同頭をクリクリ坊主にそり落として市中を練り歩いたこともあつた。

宅の長屋に重兵衛さんの家族がいてその長男の楠さんというのが裁判所の書記をつとめていた。その人から英語を教わった。ウイルソンかだれかの読本を教わっていたが、楠さんはたぶん奨励の目的で将来の教案を立てて見せてくれた。パーレー万国史、クワツケンボス文典などという書名を連ねた紙片に過ぎなかつたが、それが恐ろしく幼い野心を燃え立たせた。いよいよパーレーを買いに行つたとき本屋の番頭に「たいそうお進みでございますねえ」といわれてひどくうれしがったものである。その時の幼稚な虚栄心の満足が自分の将来の道を決定するいろいろな因子の中の一つになつたかもしれないという気がする。この楠さんはまたゲートの「狐の裁判」の翻訳書を貸してくれた人である。「漢

楚軍談」^{ぐんだん} 「三国志」^{さんごくし} 「真田三代記」^{さなださんだいぎ} の愛読者であつたところの明治二十年ごろの田舎の子供にこのライネケフックスのおとぎ話はけだし天啓の稲妻であつた。可能の世界の限界が急に膨張して爆発してしまつたようなものであつたに相違ない。

やはりそのころ近所の年上の青年に仏語を教わろうとしたことがある。「レクチュール」という読本のいちばん初めの二三行を教わつたが、父から抗議が出てやめてしまつた。英語がまだ初歩なのに仏語をちゃんぽんに教わつては不利益だという理由であつたが、実際はその教師となるべき青年が近隣で不良の二字をかぶらせた青年であるがためだということが後にわかつて来た。思うにかれは当時の新思想の持ち主であつたのである。それから十年

の後高等学校在学中に熊本の通町の古本屋で仏語読本に鉛筆ですきまなしにかなの書き入れをしたのを見つけて来て独習をはじめた。抑圧された願望がめざめたのである。子供に勉強させるには片端から読み物に干渉して良書をなるべく見せないようにするのも一つの方法であるかもしれない。そうして読んでいけないと思う種類の書物を山積して毎日の日課として何十ページずつか読むように命令するのも一法であるかもしれない。

楠さんくすも、この不良と目された不幸な青年も夭死ようししてとくの昔になくなったが、自分の思い出の中には二人の使徒のように頭上に光環をいただいで相並んで立っているのである。この二人は自分の幼い心に翼を取りつけてくれた恩人であった。

楠さんの弟の亀かめさんはハゴを仕掛けて鳥を捕えたり、いろいろの方法でうなぎを取ったりすることの天才であった。この亀さんから自分は自然界の神秘についていかなる書物にも書いてない多くのものを学ぶことができた。

中学時代の初期には「椿説弓張月ちんせつゆみはりづき」や「八犬伝はつけんでん」などを

読んだ。田舎いなかの親戚しんせきへ泊まっている間に「梅曆うめぐよみ」をとところ

どころ拾い読みした記憶がある。これらの読み物は自分の五体の細胞の一つずつに潜在していた伝統的日本人をよびさまし明るみへ引き出すに有効であった。「絵本西遊記えほんさいゆうき」を読んだのもその

ころであつたが、これはファンタジーの世界と超自然の力への憧ど憬うけいを挑ちよう発はつするものであつた。そういう意味ではそのころに

見たしよ松うき旭よく斎さい天いてん一いちの西洋奇術もまた同様な効果があつたかもしれないのである。ジュール・ヴェルヌの「海底旅行」はこれに反して現実の世界における自然力の利用がいかに驚くべき可能性をもっているかを暗示するものであつた。それから四十年後の近ごろになつて新聞で潜航艇ノーチラスの北極探検に関する記事を読み、パラマウント発声映画ニュースでその出発の光景を見ることになつたわけである。この「海底旅行」や「空中旅行」「金星旅行」のようなものが自分の少年時代における科学への興味を刺激するに若干の効果があつたかもしれない。

洪こう水すいのように押し込んで来る西洋文学の波頭はまずいろいろなおとぎ話の翻訳として少年の世界に現われた。おとなの読み物

では民友社のたしか「国民小説」と名づけるシリーズにいろいろの翻訳物が交じっていた。矢野やの竜溪りゅうけいの「経国美談」を読まない中学生は幅がきかなかつた。「佳人の奇遇」の第一ページを暗唱しているものの中に自分もいたわけである。

みやざきこしよし

宮崎湖処子の「帰省」が現われたとき当時の中学生は驚いた。

尋常一様な現実の生活の描写が立派な文学でありうるのみか、あらゆる在来の文学中に求め得られない新鮮な美しさを包蔵しうるという事実を発見して驚いたのであった。アーヴィングの「スケッチブック」が英学生の間で流行していたのもそのころであったと思う。

まつむらかいせき

松村介石の「リンカーン伝」は深い印銘を受けたものの一

つである。リンカーンはたった三冊の書物によってかれの全性格を造り上げたという記事が強く自分を感動させたのであったが、この事實は書物の洪水の中に浮沈する現在の青少年への気付け薬になるかもしれない。

「リンカーン伝」でよびさまされた自分の中のあるものがユーゴーの「ミゼラブル」でいつそう強くあおり立てられたようである。

当時まだ翻訳は無かったように思うが、自分の見たのは英訳の抄し
ようやくほん

訳本でただ物語の筋だけのものであった。そうして当時の自分の英語の力では筋だけを了解するものもなかなかの骨折りであったが、そのおかげで英語が急に進歩したのも事實であった。学校で教わっていた「クライブ伝」や「ヘスチング」になんの興味も

感じることでできなくてかわき切っていた頭にあたたかい人間味の雨をそそいだのであった。この雨が深くしみ込んで、よかれあしかれその後の生活に影響したような気がする。

当時は「明治文庫」「新小説」「文芸倶楽部」などが並立して露伴、紅葉、美妙齋、水蔭、小波といったような人々がそれぞれの特色をもってプレアデスのごとく輝いていたものである。氏らが当時の少青年の情緒的教育に甚大な影響を及ぼしたことはおそらくわれわれのみならずまたいわゆる教育家たちの自覚を超越するものであったに相違ない。

たしか「少年文学」と称する叢書があつて「黄金丸」「今まべんけい」「宝の山」「宝の庫」などというのが魅惑的な装幀に

飾られて続々出版された。富岡永洗、武内桂舟などの木版色刷りの口絵だけでも当時の少年の夢の王国がいかなるものであつたかを示すに充分なものであろう。

これらの読み物を手に入れることは当時のわれわれにはそれほど容易ではなかつた。二十銭三十銭を父母にもらい受ける手数料のほか書店にたのんで取り寄せてもらう手続きがあつた。しかし何度も本屋へ通つてまだかまだかと催促してやっと手に入れたときの喜びはおそらくそのころのわれわれ仲間の特権であつたかもしれない。

当時の田舎いなかの本屋はいばつたものであつたような気がする。われわれは頭を下げて売ってもらつていたような感じがある。これ

は当然であつたかもしれない。少なくともわれわれにとつて書物は決して「商品」ではなかつた。それは尊い師匠であり、なつかしい恋人であつて、本屋はそれをわれわれに紹介してくれるだいな仲介者であつたわけである。

読書の選択やまた読書のしかたについて学生たちから質問を受けたことがたびたびある。これに対する自分の答えはいつも不得要領に終わるほかはなかつた。いかなる人にいかなる恋をしたらいいかと聞かれるのとたいした相違はないような気がする。時にはこんな返答をすることもある。「自分でいちばん読みたいと思う本をその興味のつづく限り読む。そしていやになつたら途中でるかまわず投げ出して、また次に読みたくなつたものを読んだら

いいでしょう」大根が食いたくなる時はきつと自分のからだが大根の中のあるビタミン・エツキスを要求しているのであろう。その時われわれは何も大根を食うことの必然性を証明した後でなければそれを食っていけないわけのものではない。また友人のIが大根を食ってよろずの病を癒やし百年の寿を保つとしても、自分がそのまねをして成効するという保証はついていない。ある本を読んで興味を刺激されるのは何かしらそうなるべき必然な理由が自分の意識の水平面以下に潜在している証拠だと思われる。それをわれわれの意識の表層だけに組み立てた浅はかな理論や、人からの入れ知恵にこだわって無理に押えつけねじ向ける必要はないように思われる。人々の頭脳の現在はその人々の過去の履歴の

函^{かんすう}数である。それである人がある時にAという本に興味を感じて次にBに引きつけられるということが一見いかに不合理で偶然的に見えても、それにはやはりそうなるべきはずの理由が内在しているであろう。ただそれを正当に認識するには、ちようど精神分析の大家がわれわれの夢の分析判断を試みるよりもいつそう深刻な分析と総合の能力を要求するであろう。

それだから、ある時にちつとも興味のなかつた書物をちがつた時に読んでみると非常な興味を覚えることも珍しくない。子供の時にきらいであつた塩^{しお}辛^{から}が年取つてから好きになつたといつて、別に子供の時代の自分に義理を立てて塩辛を割愛するにも及ばないであろう。

なんべん読んでもおもしろく、読めば読むほどおもしろみの深
入りする書物もある。それは作ったもの、こしらえたものにはま
れで、生きたドキュメントというような種類のものに多いのは
むしろ当然のことであろう。

二、三ページ読んだきりで投げ出したり、またページを繰って
さし絵を見ただけの本でも、ずっと後になつて意外に役に立つ場
合もある。若い時分には、読みだした本をおしまいまで読まない
のが悪事であるような気がしたのであるが、今では読みたくな
本を無理に読むことは第一できないしまった読むほうが悪いような
気がする。時には小説などを終わりのほうから逆にはじめのほう
へ読むのもおもしろい、そうしていけない理由もない。活動のフ

イルムの逆転をしてはいけない事はないと同じである。

いろいろな書物を遠慮なくかじるほうがいいかもしれない。宅うちの花壇へいろいろの草花の種をまいてみるようなものである。そのうちで地味に適応したものが栄えて花実を結ぶであろう。人にすすめられた種だけをまいて、育たないはずのものを育てる努力にひと春を浪費しなくてもよさそうに思われる。それかといって一度育たなかった種は永久に育たぬときめることもない。前年に植えたもののいかんによって次の年に適当なものの種類はおのずから変わることもありうるのである。

健康である限りわれわれの食物はわれわれが選べばよいが、病気的时候は医者イサナの薬も必要かもしれない。しかし薬などのまずに

なおる人もあり薬をのんでも死ぬ人もある。書物についても同じことがいわれはしないか。

クリスマス用の意に鷺がちよう鳥をつかまえてひぎの間にはさんで首つ玉をつかまえて無理に開かせた嘴くちばしの中へ五穀をぎゅうぎゅう詰め込む。これは飼養者の立場である。鷺鳥の立場を問題にする人があらばそれは天下の嘲ちようしやう笑しやうを買うに過ぎないであろう。鷺鳥は商品であるからである。人間もまた商品でありうる。その場合にはいやがる書物をぎゅうぎゅう詰め込むのもまたやむを得ないことであろう。そういう場合にこの飼料となる書籍がいつそう完全なる商品として大量的に生産されるのもまた自然の成りゆきと見るべきであろうか。

日本では外国の書物を手に入れるのがなかなか不便である。書店に注文すると二か月以上もかかる。そうして注文部と小売部と連絡がないためか、店の陳列棚ちんれつだなにそれが現存していても注文した分が着荷しなければ送ってくれなかったりする。頼んだつもりのが頼んだことになっていかなかったりすることもある。雑誌のバックナンバーなど注文すると大概絶版だと断わって来るがライブチヒの本屋に頼むとたいていはじきに捜し出してくれるのである。天下の愚書でも売れる本はいつでも在庫品があり、売れない本はめったにない。これも書物が何々株式会社の「商品」であるとするればもとより当然のことである。それで自然に起こる要求は、そういう商品としてでない書籍の供給所を国家政府で経営して大概

の本がいつでもすぐに手に入れられるようにしてもらふことはできないかということである。もつともこうなると自然に書物の種類にある限定を生じるに相違ないが、それでもかまわないと思うのである。少なくとも科学や技術方面の書物だけでもさし当たつてそうしてほしいと思う。国立図書館といったようなものと少なくとも同等な機関として必要なものでありはしないか、こういう虫のいい空想も起こるくらいに不便を感じる場合が多いのである。

若いおそらく新参らしい店員にある書物があるかと聞くと、ないと答える。見るとちゃんと眼前の棚たなにその本が収まっている事がある。そういうときにわれわれははなはださびしい気持ちを味わう。商人が自分の商品に興味と熱を失う時代は、やがて官吏が

職務を忘却し、学者が学問に倦怠けんたいし、職人が仕事をごまかす時代でありはしないかという気がすることもある。しかし考巧忠実な店員に接したなごころ掌をさすように求める品物に関する光明を授けられると悲観が樂觀に早変わりをする。現代の日本がやはりたのもしく見えて来ると同時に眼前の書籍を知らぬ小店員を気の毒に思うのである。

ドイツのある書店に或ある書物を注文したらまもなく手紙をよこして、その本はアメリカの某博物館で出版した非売品であるが、御希望ゆえさし上げるように同博物館へ掛け合つてやったからまもなく届くであろうと通知して来た。そうしてまもなくそれが手もとに届いたのであった。ありがたくもあればまたドイツ人は恐

ろしいとも思った。これが日本の書店だと三月も待った後に御注文の書籍は非売品の由につきさよう御承知くだされたしという一枚のはがきを受け取るのではなかったかと想像する。間違ったらゆるしてもらいたい。そう想像させるだけの因縁はあるのである。

書店にはなるべく借金をたくさんにこしらえるほうがいいという話を聞いて感心したことがある。正直に月々ちやんと払いをすませるような顧客は、考えてみると本屋でもてなくてもよいわけであった。それでバックナンバーでも注文する時はその前に少なくとも五六百円の借金をこしらえておくほうが有効であるかもしれない。これは近ごろの発見であるような気がした。

将来書物がいつさい不用になる時代が来るであろうか。英国の

空想小説家は何百年間眠り続けた後に目をさました男の体験を描いているうちにその時代のライブラリーの事を述べている。すなわち、書物の代わりに活動のフィルムの巻物のようなものができていて文字を読まなくても万事がことごとくわかることになっていく。しかしこれは少し書物というものの本質を誤解した見当ちがいの空想であると思われる。

それにしても映画フィルムがだんだんに書物の領分を侵略して来る事はたしかである。おそらく近い将来においていろいろのフィルムが書店の商品の一部となって出現するときが来るのではないか。もしも安直なトーカーの器械やフィルムが書店に出るようになれば教育器械としてのプロフェッサーなどはだいたい暇になる

ことであろう。

今からでも大書店で十六ミリフィルムを売り出してもよくはないか。そうして小さな試写室を設けて客足をひくのも一案ではないかと思われるのである。近ごろ写真ばかりの本のはやるのはもうこの方向への第一歩とも見られる。

読みたい本、読まなければならぬ本があまり多い。みんな読むには一生がいくつあっても足りない。また、もしかみんな読んだら頭はからっぽになるであろう。頭をからっぽにする最良法は読書だからである。それで日下部氏くさかべのいわゆる少なくとも読む、その少数の書物にどうしたらめぐり会えるか。これも親のかたきかたきのよ
うなもので、私の尋ねる敵かたきと他の人の敵とは別人であるように私

の書物は私が尋ねるよりほかに道はない。

ある天才生物学者があつた。山を歩いていてすべつてころんで尻もちをついた拍子に、一握りの草をつかんだと思つたら、その草はいまだかつて知られざる新種であつた。そういう事がたびたびあつたというのである。読書の上^{じようず}手な人にもどうもこれに類した不思議なことがありそうに思われる。のんきに書店の棚^{たな}を見てあるくうちに時々気まぐれに手を延ばして引っぱりだす書物が偶然にもその人にとって最も必要な本であるというようなことになるのではないか。そういうぐあいに行けるものならさぞ都合がいいであらう。

一冊の書物を読むにしても、ページをパラパラと繰るうちに、

自分の緊要なことだけがページから飛び出して目の中へ飛び込んでくれたら、いつそう都合がいいであろう。これはあまりに虫のよすぎる注文であるが、ある度までは練習によってそれに似たことはできるものようである。実際何十巻ものエンクロペディーやハンドブックを通読できるわけのものではないのである。

間違いだらけで恐ろしく有益な本もあれば、どこも間違いがなく、てそうしてただ間違っていないというだけの事以外になんの取り柄もないと思われる本もある。これほど立派な材料をこれほど豊富に寄せ集めて、そうしてよくもこれほどまでにおもしろくなくつまらなく書いたものだと思う本もある。

翻訳書を見ていると時におもしろいことがある。訳文の意味が

どうしてもわからない場合に、それを一ぺん原語に直訳して考えてみるとなるほどと合点がてんが行って思わず笑い出すことがある。たとえば「礼服を着ないでサラダを出した」といったような種類のものである。

先端的なものの流行はやる世の中で古いものを読むのも気が変わってかえって新鮮味を感じるから不思議である。近ごろ「ダフニスとクロエ」の恋物語を読んでそういう気がするのであった。今のモボ、モガよりもはるかに先端的な恋をしているのである。アリストファーンエスの「雲」を読んで学者たちが蚤のみの一躍は蚤の何歩に当たるかを論ずるところなどが、今の学者とちつとも変わらぬ生き写しであることをおもしろいと思うのであった。「六国りっこく

史」を読んでいると現代に起こっていると全く同じことがた
少しばかりちがった名前の着物を着て古い昔に起こっていたこと
を知つてあるいは悲観しあるいは樂觀するのである。だんだん読
んでいると、古い事ほど新しく、いちばん古いことが結局いちば
ん新しいような気がして来るのも、不思議である。古典が続々新
版になる一方では新思想ものが露店からくずかごに移されて行く
のも不思議である。

それにしても日々に増して行く書籍の将来はどうなるであろう
か。毎日の新聞広告だけから推算しても一年間に現われる書物の
数は数千あるいは万をもつて数えるであろう。そうしてその増加
率は年とともに増すとすれば遠からず地殻は書物の荷重に堪えか
ちかく

ねて破壊し、大地震を起こして復讐ふくしゆうを企てるかもしれない。そういう際にはセリユローズばかりでできた書籍は哀れな末路を遂げて、かえって石に刻した楔形文字くさびがたもじが生き残るかもしれない。そうでなくとも、また暴虐な征服者の一炬いつきよによって灰にならないくとも、自然の誤りなき化学作用はいつかは確実に現在の書物のセリユローズをぼろぼろに分解してしまうであろう。

十年来むし込んでおいた和本を取り出してみたら全部が虫のコロニーとなって無数のトンネルが三次元的に貫通していた。はたき集めた虫を庭へほうり出すとすずめが来て食ってしまった。書物を読んで利口になるものなら、このすずめもさだめて利口なすずめになったことであろう。

(昭和七年一月、東京日日新聞)

青空文庫情報

底本：「寺田寅彦隨筆集 第三卷」小宮豊隆編、岩波文庫、岩波書店

1948（昭和23）年5月15日第1刷発行

1963（昭和38）年4月16日第20刷改版発行

1997（平成9）年9月5日第64刷発行

入力：(株)モモ

校正：かとうかおり

2003年4月1日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

読書の今昔

寺田寅彦

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>